

杉原四郎・岡田和喜編

『田口卯吉と東京経済雑誌』

日本経済評論社 1995.2 viii+608 ページ

田口卯吉は、1872年(明治5)に大蔵省翻訳局の「上等生徒」となり、74年には大蔵省紙幣局に就職、78年まで大蔵省に在職した。それ以前には医学志望だった田口は、志望をかえてこの期間にイギリス流の自由主義経済学を学んだ。この勉学の成果をふまえて『自由交易日本経済論』が書かれ、すぐひきつづいて『日本開化小史』が書かれた。しかし、月給30円では家族の扶養が困難だった田口は、78年、著述と翻訳に従事する目的で大蔵省を辞し、79年1月に『東京経済雑誌』(以下、『東経誌』と略称)を創刊した。弱冠24歳のときのことである。

『東経誌』は、渋沢栄一らのすすめではじめられたもので、はじめは銀行同業者団体扱善会の援助をうけ、扱善会の機関誌的な性格をもっていた。しかし、扱善会との関係は間もなく清算されて、経済雑誌として自立した。当初は月刊、ついで月2回刊、3回

刊をへて、81年7月からは週刊となった。雑誌そのものは1923年、2138号までつづいたが、雑誌として生彩に富んでいたのは田口が死んだ1905年(明治38)ごろまでで、その後は『東洋経済新報』『実業之日本』『実業之世界』などのライバル誌の登場によって、しだいにその影響力を失った。

本書は、明治期の経済雑誌を代表する『東経誌』についての13名の執筆者による共同研究の成果をまとめたものである。出版ジャーナリズムとしての『東経誌』の活動についての分析(有山輝雄)や、わが国の人名辞典の嚆矢とされる『大日本人辞書』の経済思想史研究上の意義を論じた論文(田口照美)、『東経誌』所載の出版広告についての詳細な研究(金沢幾子)などを含んでいるが、本書の主要な内容は、『東経誌』を素材とする田口の思想についての経済思想史的研究である。杉原四郎氏の総括的な論文を巻頭に、以下、自由貿易か保護政策かなど3つの経済論争(熊谷次郎)、公債問題(戒田郁夫)、租税問題(川又祐)、『東経誌』の金融誌的側面(本間靖夫)、貯蓄問題(岡田和喜)、解放経済国家の構想(小峰和夫)、鉄道問題(老川慶喜)、社会・労働問題論争(和田強)、経済学協会の活動(松野尾裕)などがそれに当る。

『東経誌』と田口の経済思想は、これまで経済思想史の一環として、欧米の近代的経済学・経済思想の導入・撰取の観点から研究されてきたといえよう。本書の編者の一人杉原四郎氏がこの分野でもっとも重要な開拓的業績をあげてこられたことは、門外漢の私などもすこしは知っている。本書は、この杉原氏による共同研究の提言をふまえて、ベテランから若手までの多様な研究者たちが、出版史や書誌学の視点なども取りいれ、多面的に分析した研究成果である。本文だけで465頁、ほかに模範的ともいべき詳細な年譜・著作目録を付した大冊である。『東経誌』が復刻されたことがこうした研究を可能にした前提条件なのであろうが、経済学や経済史などのそれぞれの領域から、専門知識を生かした緻密な分析方法で田口の思想に多角的に迫ったところに本書の特色があろう。

本書の記述に従って、田口の経済思想をもうすこし具体的にたどってみよう。たとえば、自由貿易か保護政策かをめぐる論争で、田口は初期の『自由交易日本経済論』以来一貫して徹底した自由貿易主義の立場をとり、F・リストなどに依拠して保護政策を主張する『東海経済新報』と論争を展開した。熊谷氏によれば、後進国日本にとっては『東海』の主

張する保護政策の方が歴史認識として妥当と思われるのだが、A・スミスにはあった自由貿易についての留保条件も取り払った徹底的な自由貿易主義が田口の立場である。また田口は、民間部門に干渉する工部省・文部省・内務省などを不要とするほどのラディカルな政費節減論者だったが、80年代初頭に論議を呼んだ外債問題については、塩専売や織物税などを導入する位なら公債募集の方がよい、そのばあい、利率が低く募集が便利であれば外債でよい、と主張した(戒田論文)。鉄道問題については、自由主義経済論の立場からして当然ともいえるが、民有鉄道論をとり、輸送力増強のためにブルジョアジーの要求が鉄道の統一・国有化で一致しつつあった時期になっても、そうした現実状況を無視するかのようにおなじ民有論を貫いた(老川論文)。

田口はまた、政費増大を批判しながらも、地租増徴を主張した。地租を増徴してもそれは主として寄生地主の負担となり、一般農民と小作人には及ばない、地租中心主義をとることが最下級人民の民力休養になるという主張であるが、それにともなって家屋税・遺産税という資産課税強化も主張した(川又論文)。貯蓄問題については、小額貯金に便利な郵便貯金をつよく支持したが、民衆の僥倖心をあおる割増金賦与に反対し、庶民の貯蓄が疑似共同体的強制を伴うことや極端な節儉・力行に傾く傾向を批判した(岡田論文)。田口はまた労働者保護について豊原又男と論争したが、労働時間の短縮と婦女子労働の禁止という二つの論争点について、田口はともに完全な自由放任とし需要供給の理に任すべきだとした(和田論文)。

田口は強烈なナショナリストではあったが、しかしそれは徹底した開放経済の主張と矛盾することではなかった。条約改正問題については、その当時批判の大きかった外国人の内地雑居について積極的にその自由化を主張し、中国人・朝鮮人労働者の内地雑居についても歓迎するとのべた。治外法権と居留地にはつよく反対したが、税権回復については、その濫用が保護貿易主義に結果することを恐れて余り重きをおかなかった(小峰論文)。また田口を中心とする経済学協会は、田口をオルガナイザーとして各種の経済調査を実施したが、それは「経済の道理」をもって日本近代の「開化」のあり方を問いなおすという意味をもった活動であった(松野尾論文)。

問題別に田口の経済思想を整理し批評するという組立てになっている本書のなかから、重要だと思う

論点をいくつか拾いあげてみた。論点を網羅したわけではないし、丁寧な紹介でもない。また論者によってやや見方の異なるところもあるが、右の紹介はその点にまで立ちいったものではない。しかし、そうした限定つきながら、本書で論じられている田口の経済思想の特徴について、右に概括しただけでも私はほとんど見紛らうことがないように思う。民間の自由な経済活動の決定的な重視、政府の干渉の排除と政費の抜本的削減、需給原理の支配への信頼、自由貿易と開放経済などの経済的自由主義であり、状況の変化や問題の多様性にもかかわらず、その立場は一貫しており徹底していたということである。『東経誌』は経済統計などデータを重んじていたし、松野尾氏が論じているような各種調査の先駆的实施もあり、田口には問題のあり方いかんによっては政府の政策に同調するような側面もあった。しかしそれでも田口の基本的な立場は変わらず、田口はどこまでも意気軒昂として論争的だった。経済のさまざまな領域についての田口のご思想のこうした特徴が、具体的に詳細に明らかにされたところに本書の意義があるのだと考える。

だが、田口の生涯を一貫するこの意気軒昂とした論争性は、経済的自由主義への確信というだけでは理解しえないものであろう。田口のご思想には、一見したところの明快さとは裏腹にある種の奇妙なわかりにくさが存在するのであって、この後者の側面は本書のなかでもさまざまな形で指摘されているといえよう。たとえば、後進国日本にとっては保護政策の方が妥当だったと思われるのに、田口は敢えて自由貿易主義をとりつづけたという熊谷論文や、田口が「やみくもに自由主義の主張を押し貫いて生涯を全うした」(197頁)という小峰論文の指摘、日清戦後の鉄道国有化批判は、激しく、しかし内容は実態を無視したものになってゆくという老川論文の指摘などは、そのような意味で興味深いと思う。田口のご思想のこの奇妙な頑固さは、従来も指摘されてきたことであり、本書の著者たちにも自覚されているけれども、しかしけって明快に解明されていないのであって、その点に物足りなさを覚えるのは私だけではなからう。

田口のご思想系譜はもとより広い意味ではイギリス古典派・マンチェスター派なのだが、リカード、ミルなどとは立場を異にし、コンディヤック以下の第三学派と立場をおなじくするのだという。また、田口の「自由貿易主義にはユートピア的ともいえるほ

どの徹底性があり、この点でA・スミスとも異なる(35頁)というのも、田口のご思想を考えるうえで興味深い指摘であろう。和田氏は、大河内一男氏のスミス研究を援用して、田口はスミスの近代市民社会論を日本に適用しようとしたのであり、その具体的側面として「製造主に対して絶対的な信頼をおいていた」(287頁)ともいうが、この点は熊谷氏や本間氏の右の見解とはやや異った見方のごようだ。しかし、経済学史の知識を欠く私が、こうした見解のちがいについて立ちいって論ずるのは不必要なことだろう。だが、田口のご学説史的系譜をいかに捉えるにしろ、田口にとっては、政治と経済を明確に分離したうえで、需要と価格の世界に自律的に貫く理法が経済学なのであろう。そして重要なのは、そのことがまた田口のご思想家としての立場でもあって、政治の干渉を排した徹底せる自由主義が、経済の論理という形をとって頑強に貫かれているということであろう。田口が経済学を学んだ明治初年には、イギリス古典派がもっとも代表的な経済学説だったし、時代状況としてもそれが当時の田口にとって説得的に思えたことは理解しうることだが、その後の田口は非現実的にさえその自由主義を貫いたというのだから、そこにはなお説明を必要とする大きな問題が残されているわけであろう。

本書の総論的位置を占める杉原論文では、田口にはエコノミストの側面と史学者の側面があり、ふたつの側面は密接に結びついていたとされている。またおなじ箇所では杉原氏は、『鼎軒田口卯吉全集』の構成と各巻の解説者名をあげ、そのこと自体が「田口のご全業績の幅の広さとその中に占める経済論の比重を示している」(6頁)という。だが本書は、『東経誌』のなかから田口のご経済問題にかかわる論説をとりだして問題別に評論するという手法で構成されているので、そうした田口のご全業績は見えてこず、そのこともおそらく田口のご思想の本質をなす自由主義の由来と骨格についてなお十分に説得的に論じられていないという印象を与える理由になっているのであろう。田口につよい親愛感をもっていた福田徳三は、田口は文明史家でも経済学者でもなかった、田口は政治学者・政治家・政治史家であって、『東経誌』はどんな問題についても「其最終原因を政治に帰した」と論断した(同右全集第二巻解説)。こうした福田の立場からは、さまざまな経済問題についての自由放任の主張は、その政治的自由主義(民主主義、自由民権主義とも福田はのべている)の応用篇であっ

て、その基底にはさらに旧幕臣出身者としての憤懣や江戸っ子的反逆精神が息づいていたことになる。福田のような田口観が当たっているかどうかは、ここで論ずるのにふさわしくないが、福田のように、経済思想から田口を論ずることの限界を明快に指摘する見解もあることに注目しておきたい。それはともかく、本書よりもずっと広い歴史的な、また人間論的な文脈で田口を論ずる必要があることを、本書の記述自体が示唆していると私は考える。

[安丸良夫]